二つの運命

小川未明

青空文庫

風の出そうな空模様の日でありました。一ぴきのせみが、小さなこちょうに出あいました。

「なんだか怖ろしいような空模様ですね。今夜はあれるかもしれません。早く家へ帰りましょう。」と、せみはいいました。

正直なこちょうは、空を見上げて、

「ほんとうに暗くなりました。あんなに雲ゆきが早うございます。早く家へ帰りましょう。」と答えました。

そこで、ふたりは、風に吹かれながら空を飛んできましたが、小さなこちょうは、おくれがちなので、せみはもどかしく思いました。

「こちょうさん、あなたのお家はどこですか。」とききました。

「私の家は、あちらの花圃です。あすこには姉も妹もきて待っています。」と答えました。

「あんな頼りのない花圃なんですか、今夜の大風をどうして、あんなところで防ぐことができますか。」と、せみはあきれたような顔つきをしていいました。

こちょうは、また空を見上げました。ますますものすごく空の景色はなっていくばかりです。

「あなたのお家は、どこですか。」と、こちょうはせみにたずねました。

「私の家ですか。それは大きな木です。もうすこしいくと、その木が見えるはずです。こんもりとしげっていて、風や雨が、めったにさらすものではありません。どんな大風が吹いても、それは安全なものです。私たちには、とてもあなたのようなおぼつかない生活はできないのです。」と、せみは得意になって答えました。

あちらには、黒いこんもりとした大きな木が見え、こちらには、きれいな花のたくさん咲いている花圃が見えました。二人は、別れなければなりませんでした。

「そんならこちょうさん、今夜をお気をつけなさいまし。また、ふたりが無事でしたら、お目にかかりましょう。」と、せみはいいました。

「あなたも、どうぞご機嫌よう。私は、あなたの幸福を神さまに祈っています。」と、こちょうはいいました。そして、右と左に分かれていきました。

「ほんとうに、あの哀れなこちょうに、ふたたびあわれるだろうか。」と、せみは途すがら考えました。

はたして、その夜の暴風雨といったら、たとえようのないほど、ものすごかったのであります。せみは、大木に止まっていましたが、幾たび振り落とされようとして、びっくりしたかしれません。そして、ろくろく眠ることすらできなかったのです。しげった枝の間から、雨は落ちてきました。大波の打ち寄せるように、また水の泡だつように、葉は音をたてて騒ぎました。せみは不安で生きているような気持ちはしなかったのです。

「かわいそうに、この暴風雨で、あのこちょうは死んでしまったろう。」と、せみは、怖ろしいうちにも、こちょうのことを思い出していました。

翌日、雨がはれ、風が止むと、せみは花圃の方へこちょうのようすを見ようと飛んでいきました。そのとき、ちょうど彼は、こちょうに出あいました。

「ご機嫌よう。」と、こちょうは、せみに声をかけました。せみは

意外に思ったような顔つきをして、

「昨夜は、なんともありませんでしたか。」と、たずねました。

「たいへんな暴風雨でございましたね、みんなは抱き合ってふるえていました。私はどうなることかと心配しましたが、それでもみんなは無事でございました。お日さまが出られたので、このとおり元気になりました。」と、小さなこちょうは勇んでいいました。

せみは、心の中でこちょうを不憫に思いました。昨夜は、幸いに助かったが、このつぎの暴風雨のときには、きっと花は散り、こちょうは死んでしまうだろう。それに気づかないとはかわいそうなものだと思いました。

「こちょうさん、だんだん秋が近づいてきました。みんなが死を考えなければならなくなりました。」と、せみはいいながらも、自分だけは、あの大きな木のしげった中に身を隠していれば、寒くなったって、そんなに怖ろしいこともないだろうと思っていたのです。

「私は、寒くなることを考えると身ぶるいします。私のすみかにしています、あのやさしい花が散る日のことを考えると私は、身を切られるように感じます。」と、こちょうは怖ろしさに身を震わしていいました。

「おたがいに、こうして達者でいましたら、またお目にかかります。いまのうちに、うんとあなたは舞ったり、踊ったりなさいまし。」と、せみは、こちょうをかわいそうに思って、こういって、なぐさめまして、いずくへともなく立ち去ってしまいました。

日にまし、風が強くなって、いままで南から吹いたものが、西から吹き、北から吹くようになると、遠い、高い山の雪の上を越えてくるとみえて、風は、冷たく、寒くなりました。こちょうは心配げに見えたのであります。

元気よく鳴いているせみの声は細っていきました。この世の中が急にこんなに変わりましたので、ふたりは、もう、たがいに出あって物語をするようなこともなかったのです。

それは、みんなの虫類にとって、このうえもない怖ろしい霜の降った日のことです。夜が明けると、あたりは音もなく静まりかえって、草や木の葉はみんな白くしおれていました。そして、すべての虫がたいてい、夜の間に死んでしまったらしいのです。

その大きな木の下には、自分だけは生き残ろうと空想したせみが死骸になって地の上に落ちていました。そして、はや、小さなありどもが、どこからかその死骸をかぎつけてきていました。

花圃にいってみると、無残にも花は頭を地につけて見る影もなかったけれど、まだ小さなこちょうは抱かれていました。こちょうと花は最後まで助け合って、運命に身をまかせていたのです。花に止まったこちょうは破れた羽をかすかに動かして、いまにも太陽の上るのを待っているのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　2」講談社
1976（昭和51）年12月10日第1刷
1982（昭和57）年9月10日第7刷
※表題は底本では、「二つの運命《うんめい》」となっています。
入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班
校正：江村秀之
2013年11月5日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二つの運命

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/